

Title	大塚和夫著,『異文化としてのイスラーム:社会人類学的視点から』
Sub Title	
Author	森川, 孝典(Morikawa, Takanori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1993
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.1/2 (1993. 8) ,p.203- 209
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930800-0203">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19930800-0203</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大塚和夫著

『異文化としてのイスラーム——社会人類

学的視点から』

森川孝典

信仰のあり方は、個人的集団的経験に基づいている。

したがって、文化と結びついたものであり、歴史的・社会的関係によって変化するものである。近代までごく一般的であった聖者信仰、精霊崇拜が厳格なワッハーブ主義が台頭するや疑問視される風潮が出てきたように、信仰のあり方の解釈は、時代時代において一様ではない。

かといって、ワッハーブ主義が台頭して、伝統的信仰のあり方が一掃されてしまったかといえば、そうではなく、それは根強く残った。したがって、信仰というものは、むしろ、いろんなあり方において併存しあっていると見なした方がより実状に近い。さらに、ある時代には、

ウラマーが同時にスーアイーである場合もあり、同一人物に異なる信仰のあり方があり同居する場合さえある。また、一方の主義が他方のそれを部分的に共有する場合さえあるのである。

こうして、信仰のあり方は、一方で多元的なものである。しかし他方で、各要素は実体として独自に存在しているのではなく、あくまで全体との関係において存在している点も見逃してはならない。文化は全体をもつて一つのシステムを成しており、一部分になんらかの変異が生ずればその他の部分にもなんらの変異が生ずるのである。

本書は、信仰のあり方を視点（てこ）としてイスラームという宗教現象を多元的に究明しようとした稀有の書である。社会人類学的視点からという副題はそういう意味を込めて付けられている。一方、主題の「異文化としてのイスラーム」には、日本人であるわれわれにとつてイスラームはいやがうえにも異文化であるという筆者の著者が日本人であるが故にイスラームという異文化と会い、それを理解・解釈する際にぶつかった問題点、それを克服するための方法論的戦略を述べた著作であると

言つてさしつかえない側面をそなえている。

したがつて、本書は多元的な視点（あるいはそれに辿り着くまで）の説明と異文化理解の方法に必要以上に多くのページを割き過ぎたきらいがないわけではない。

さて、信仰のあり方という視点から諸イスラームを論じようとする本書に対して、イスラームの歴史的変遷、地域的な広がり、スルタンカリフ制度の下に築かれた社会階層、さらに、女子の隔離の制度などを思い起させばただちに筆者のいわんとすることに合点がいくと思われる。本書では、地域差や男女差による信仰のあり方も触れられているが、なんといつても一番中心的に考察して

いるのは、社会階層的差異によつて形成される信仰のあり方についてである。筆者によれば、それは、イスラーム社会が文字社会であることと深く関係している。「伝統的なイスラーム教育体制において、クルアーンの暗唱からハディースの学習に膨大な宗教書の読破という作業がムスリム知識人に課せられた最大の義務であつた。すなわち、教典類をもつ他の大宗教と同様、イスラームの知識人は、なによりも、聖なる書物を読解しうる充分な読み書き能力を身につけていなければならなかつたのである。民衆が日常生活で用いる口語アラビア語（アン

ミーヤ）ではなく、クルアーンの言語にもとづく由緒正しい正則アラビア語（フスハー）を駆使できる学識をもつ知識人は、社会的特権階層を構成している」。

かくて、筆者の主張の第一は、信仰のあり方が最も決定的に異なるのは、文字とまるで接する機会のない人々と文字と親しく接する人々の間、すなわち民衆イスラームと知識人イスラームの間ににおいてであるという点である。そして、主張の第二は、そのことは、伝統的時代ばかりではなく、世俗的教育機関が設立された近代以降今日に至るまで基本的には変わつてはいないという点である。

本書は四部から構成されている。第一部（序論）と四部（「われわれ」にとつてのイスラーム）においてわれわれが異文化を理解する際の問題点を解説する。第二部（「社会人類学的イスラーム考察にむけて」）において、ウラマーにより構築された知識体系をもつてイスラームだとみなしがちなわれわれの先入観を排し、多元的イスラーム理解へと誘う。第三部（「近代エジプトにおけるムスリム諸勢力の理解のために」）において、伝統的な信仰のあり方が近代以降どのように変容したのか、どんな新しい動きが出てきたのかを論述している。

本書は全部で一一の章からなるので各章毎に一応の紹介をしておく。

### 第一章「自文化としての異文化」

フィールドにおける異文化の言語を用いた異文化理解（これを筆者は第一次理解という）を自分たちの言語を用いて（日本語）でまとめる（同じく第二次理解とする）際の問題点を扱う。第一次理解を日本語で表すということは、自文化の世界文節の枠組み内で解釈し、理解することになり、この意味において、第二次理解は「自文化」の一部にすぎない。だから、根源的な意味で、異文化が自文化としてしか表現できないことを認め、かつ、異文化の「見慣れなさ」を保つためには、彼我の差異を意図的に拡げ、同時に縮めるという一種のアクロバットを行わなければならないとし、自分たちのもつてている世界文節のやり方では、説明しきれないところはそのまま「否定形」にしておき、一方イスラーム世界の現象を日本語の概念で説明できるものは、そうしてみるという二つの戦略的方法論を提示している。

### 第二章「イスラームにおける「原型」とその反復」

今日行われている儀礼の多くはある歴史時代に生きた特定の人間の行為にもとづいて成立している。なかでも

特筆すべきは、ムハンマドおよびその時代である。なぜなら、ムハンマドが行つたとされる巡礼はメッカ巡礼の基になり、さらにムハンマド自身の生き方は、ムスリム個々の人の日常的行動の原型になり、ひいては、ムハンマドと教友が築いた共同体は後世のムスリムの理想とすべき社会の原型となつてゐるからである。ムハンマドについてで祖型的存在になつてゐるのは、予言者の一族、スマーフィー、聖者である。以上は、原理主義や、聖者信仰を始めさまざまな信仰のあり方を生み出す母体となり、今日まで非常に大きな影響力をもつてゐる。

### 第三章「石の墓標と聖者の廟」

ワッハーブ主義を国是とするサウジアラビアと世俗化の進んだエジプトの葬制の違いを挙げ、死ないしは死者に対する態度の差異による信仰のあり方を論及する。その差異から、エジプトでは死者信仰になりかねない聖者の信仰が発達し、今日まで聖典類を直接ひもとけない人々の典型的な信仰のあり方となつたが、サウジアラビアでは、ワッハーブ主義が台頭後聖者信仰は否定され今日に至つてゐる。

#### 第四章「イスラームの聖者信仰—エジプトの事例を中心 に」

聖者をめぐる民間信仰は、スーアイー教団のシャイフを聖者＝ワリーとみなす傾向が出現して以降隆盛となつたものであり、それとほぼ並行するかたちで予言者ムハンマドのマウリドが盛んになり始めた。また同様の動きが、予言者の従兄弟であり女婿であるアリー、そしてその子孫たち（予言者の一族はサイイド、シディ、シャリーフとよばれる）についてもみられるようになつた。彼らはアッラーから特別な祝福を得て、読心術、未来予知、空中飛翔、難病治療など普通の人々には行うこと不可能な超能力をもつと民衆に信じられた。

#### 第五章「イスラームにおける「現世利益」—交換論的 視点から—」

序論において掲げた、異文化を自文化で理解する方法の後者の例である。アッラーとムスリムの間に想定される祈願という側面を、現世利益という日本語の概念で解釈したもの。注目すべき結果として、一部の民衆にとつては、祈願をする相手も聖者であれば、救済してくれるのも聖者であり、したがつて彼らがその後あらためて返礼すべき相手も聖者であるという、アッラーがどこにも

そのコミュニニケーションの回路に介在しない場合があることを明らかしている。この信仰のあり方は、文字を用いる人々の信仰のあり方とは対極的な位置にある。

#### 第六章「民衆イスラーム論の可能性」

筆者のオリジナリティが最も強く發揮されている、本書の白眉ともいいくべき章節。筆者によれば、信仰のあり方を決定づけるのは、その知的形成過程においてである。その分かれ目にあるのが文字を読むか読めないかなのである。一方の極に、たとえば、アズハル学院の総長や四大法学派のムフテイー（法解釈の権威者）などをおり、他方の極には、まったく文字の読み書きができず宗教的知見にも乏しい民衆をおき、その中間にさまざま程度の読み書き能力やイスラーム的知識をもつた人々を配置する図式をとる。

こうして、ウラマーをもつて公式イスラーム、スーアイズムをもつて民衆イスラームと二分してきたきらいがある従来の考え方に対し、同じスーアイーのなかにも、高踏的と民衆的の二つの類型がみられるのと平行して、いわゆるウラマーにも、アズハル学院などの高等教育機関を卒業したエリートと、地方のクツターブ（寺子屋的なクルアーン学校）などの初等・中等宗教学校のみを出

たより民衆に近い「知識人」というふうに分類が可能になる。後者は、村のモスクのイマーム（礼拝時の導師）やムアッジン（礼拝呼び掛け人）を務めたり、また結婚・離婚に立ち合うマーグーン（公証人）をしたりしている。

たしかに、彼らはエリート・ウラマーとは異なり国家レベルの宗教活動とはほとんど無関係な人々である。しかし、金曜礼拝のさいや結婚契約のときの説教、さらに農民や庶民から宗教的判断にかかわる日常的相談をもちかけられたりして、その地域の民衆の宗教知識の普及に貢献し、彼らのイスラーム観の形成に一定の影響を与えていているだろう。

もはやここでは、従来言われたような、正統・異端あるいは公式・民衆イスラームという二分図式がまったく打ち捨てられ、それに代わって、諸イスラーム併存という視点が出てきて、そこで初めて、話し言葉にのみ頼らざるをえない民衆のイスラームが一つのイスラームのあり方として知識人イスラームなどのその他のあり方とともに併存することになる。

### 第七章 「エジプト人ムスリムの宗教生活」

今日のエジプトに見られる個人的、集団的宗教儀礼の概略を述べる。それらが、近現代における原理主義や世

俗化の波にさらされることにより衰退の傾向にある点を指摘。

### 第八章 「いかにしてイスラーム的知識を獲得するか――四つのムスリム類型」

近代エジプトでは、西洋的カリキュラムを採用した文科系の高等教育機関においても知識人が育成され始めた。近年において原理主義やより知的なスーアズムにむかつたのは、かような世俗的教育機関で教育を受け、独学でイスラーム的知識を身につけた人々であつた。高度の読み書き能力をもつた人々が独学で獲得するイスラームの知識あるいは解釈は、師の指導下に書物を通じて得られるウラマーの知識、スーアズムの神秘的直感知、儀礼体験および教団のシャイフとの口頭のコミュニケーションを通して得られる民衆の知識あるいは解釈とはまったく掛け離れた新しいタイプのイスラーム時知識獲得のあり方とみなされる。

### 第九章 「アッラーと人々のあいだに――スーアズムの近代」

近代においては、スーアズムの中でも指導的立場にある人々は、サラフィー主義とかなり類似した論理をもち、それにもとづいて「真」のイスラームを規定していくこう

とする傾向が存在してきた。いわゆるサラファイー的ス

ファイズムの登場である。これは、スーアファイズムが原理主義の主張を一部共有したものであるが、そのため、サラファイー的スーアファイズムとはズレた形で、民衆スーアファイズムなるあり方が生じることになった。

### 第十章「あご髭とヴェールー衣裳からみた原理主義運動」

すでに見たように、原理主義者は伝統的というより近代的知識人であるが、それは彼らが身につけていた衣裳からも窺える。ハサン・アル・バンナーの時代のそれは、当時新しく取り入れられた西洋式背広、タルブーシュ帽など近代生活を志向するエフエンディー階層に典型的な衣裳であった。現代の原理主義者の典型的衣裳は、男性があご髭（一九七九年以降に流行し始めた）、女性はイスラーム服（一九七三年以降）であるが、髭、イスラーム服即復古的、伝統的を意味せず、男女いずれの衣装も、父祖の時代にはなかつた新たに発明された衣裳である。原理主義者の採り入れる衣裳はあくまでコンテンポラリーなものであり、伝統的どころかむしろ伝統との断絶を強調したもののである。原理主義者が身につける衣裳からも彼らの伝統と近代の弁証法を読み取ることがで

きる。

### 第一一章「われわれ」にとつてのイスラーム

序章で述べた異文化理解の戦略的方法論の前者にあたる。本書において一貫してアッラーと使用しているのは、イスラームにおけるアッラーが日本語の文節体系にはおさまらない意味があるからである。日本でとかく表現されがちなアラーの神とはいわばゴッドの神といつているようなもので、その本来的な属性から見て、ゴッドの神という表現がありえないよう、アラーの神もありえないのだ。そのありえないことを疑問にもしない程、イスラームに対するわれわれの関心と知識が乏しいのである。

以上紹介を試みた。最後に、少し論評をしておく。

評者の解釈が正しいとして、本書は多元的イスラームを考察した著作である。だから、以上において見たように、原理主義と聖者信仰との間の相違を示し、また、それらが時に協調、時に拮抗している関係を指摘するのはそれでよい。しかし、それにとどまってしまっていて、それ以上のことはほとんど考察されていないのはいかにもの足りない。つまり、本書は視点の提供に終止してしまつてはいるだけなのである。

ところで、エジプトでは近頃、原理主義者のことをあ

まりにも厳格過ぎるという意味で“スンニー”と名指す風潮があるようだが、“スンニー”が厳格さの代名詞になつてゐる点はどう考えたらいいのだろうか。そういう風潮は何に由来するのだろうか。ある土地にある信仰のあり方が採用され、根づくのは、ある信仰のあり方を生み出す、あるいは受け入れる土地の風土なるもの、あるいは宗教に限らないエジプトならエジプトの文化全体も大きく与かつているのかもしれない。原理主義の批判にさらされながらもなぜ聖者信仰が根強く残るのかという観点からの究明もできたであろう。

それから、各章において、従来の研究の批判が取り上げられているが、その度に読書が妨げられる思いをした。従来の学説などについては研究史として序章でまとめて整理できなかつたものか。それに関して、東洋学に対する批判が度々でてくるのにも閉口した。東洋学の研究成果は人類学にも大いに反映されてゐるはずであり、どんな点を学んだかについても言及してほしかつた。

ともあれ、本書を通じて学ぶべき点は数多くあつた。

それは、なによりも、本書が徹頭徹尾、人類学の立場からイスラームを見る視点で一貫しているからである。評者は、本書が、待ちに待つた日本人の人類学者による初

めての本格的イスラーム人類学入門の書であり、今後に続くわれわれの頼もしい導きの書になるに違いないことを確信する。

(同文館、一九八九年、三六八頁、四、五〇〇円)